

ール註『マルコポロ旅行記』第一卷四二〇頁)と。又憲宗の世佛蘭西の聖ルイ王より蒙古に使せしルブルキー(Rubruquis)は蒙古の驛舎を稱して「ジャミアム」或は「イアム」(jamiām: jam)と記し、「カソリック」教の宣教師にして、元の文宗の代に支那に來りしオドリク(Odoric)は之を「ヤム」(yam)と呼べり、以上の「ヤムブ」・「ジャミアム」・「イアム」・「ヤム」等は皆同一語を寫せるものなること明らかにして、但だ其間に少しく音聲の相違あるのみ。明の太宗の時サマルカンドのシャー・ロク(Shah Rokh)より遣されし使節の紀行に、明の驛舎をまた「ヤム、カーネ」(yam khane)と記せり、「カーネ」は波斯語「カーナー」(khanah)即ち家の語を寫せるものなれば、「ヤム」は尙ほ蒙古時代の語がその儘に残りたるものにして、これに驛の意ありしと見ざる可らず。有名なる蒙古史『ニウチャ、トブチャン』(那珂博士譯『成吉思汗實錄』)には實に驛のことを記して「チャム」と云へり、「ヤム」なる語は、即ち之を少しく柔らかなる音を以て寫したるに過ぎず、兩者ともに尙ほ今日も東方の「トルコ」語中に存在せり、されば站チヤン(chan)なる文字は、此の「チャム」或は「ヤム」なる音を寫したるものと見るべく、曾てポーチェー(Pauthier)氏がポーロの云へる「ヤムブ」とは漢語驛馬の對音なりと説き、シュレーゲル(Schlegel)氏が之を駁して「ジャム」は支那語の站を寫したるものなりと云ひたるが如きは、共に本末を顛倒せる議論なりと云はざる可らず。『元史』に見ゆる站赤チの赤チ(chih)なる文字は蒙古語・土耳其語等の「チ」(ci)に當るべきものにして、此等の語にては事物を司るものは或は行ふものを示さんとする時は、その事物の語尾に「チ」なる語を付するを常とす。例へば蒙古語に羊を「ホニ」(honi)と云へば、羊を司るものを「ホニチ」(honici)と云ふが如し。此の如き例は『元史』について類例を求むるも其の數極めて多く、彼の文史を司どるも